癒しの天使とラブビート　3

浦賀（うらが）　狭霧（さぎり）

前書き

　この日記はフィクションである。登場する人物、事象、思想、名称は実在のものとは関係ない。ここから先の文章は僕、浦賀カスミの事象記録、思想記録である。オチも伏線もなく、とても物語と言えた代物ではない。それを承知の上でご堪能していただきたい。

人物紹介

・浦賀（うらが）カスミ　大学二年生・男　この手記の語り部。
・月居京助（つきおりきょうすけ）　大学二年生・男　通称・奇天烈変態紳士
・高萩夏彦（たかはぎなつひこ）　大学二年生・男　通称・煩悩纏いし無頼漢
・稲敷小雪（いなしきこゆき）　大学一年生・女　浦賀カスミの一つ下の後輩。浦賀カスミが密かに想いを寄せている。

あらすじ

　季節は冬となり、浦賀カスミ、月居京助、高萩夏彦は相も変わらず阿保であり、稲敷小雪は相も変わらず愛らしいままである。

No.15　絶望を食らわば希望まで

　人生で一度くらいは、『ああ、終わった』と絶望することがあるだろう。そしてそれは予兆もなく、無慈悲に天災のように襲い掛かる。そして僕は今、その絶望的状況に瀕していた。トイレの個室で頭を抱えて座り込み、苦痛に喘ぎ、ただ時が過ぎるのを待つだけの存在となっていた。肉体も精神も生命の危機に瀕していた時、走馬灯が言葉となって脳裏に流れ込んだ。

「ハァ……困ったなァ。まさか一限からお腹痛くなっちゃうなんてェ。友達（実験仲間）が教室で待ってくれてるみたいだから、急いで追いつきたいけど、お腹が痛くって、トイレから全然動けなくてェ……」

　そんな訳の分からない声が頭の中で繰り返される。腹痛による苦痛は、思考回路に異常をもたらす。額からは脂汗が垂れ、奥歯はガチガチと音を鳴らし、拳は固く握られている。大学構内のとあるトイレの個室で、僕は一世一代の大勝負に出ていた。

　科学技術が発展した現代であっても、生理現象による苦痛をなくすことはできない。人々は空腹に喘ぎ、寝不足に悩み、色欲を持て余す。無論、排泄もその一つだ。

「まったく、この国じゃ公共の場での排泄も許されてないのかよ。野良犬やカラスは好きな場所でいつでも排泄できるんだぞ。なんで人間はそれが許されてないんだ。なぜ野生動物より文明人の方が行動を制限されなければならないのだ。もっと自由であれよ！」

人間、余裕がなくなると支離滅裂な思考をするものである。あとから冷静に考えてみると恥ずかしいものだが、僕以外の人も、このような状況になる可能性がある限り、笑ってばかりもいられないだろう。

闇の組織や正体不明の怪異に追われているより、危機的な心理状況である。絶対に遅刻したくないという拘りと、排泄に時間を費やすべきだという身体が抗争を繰り広げ、さらなる苦痛が襲い掛かる。

腕時計の針は講義開始五分前を示している。ここで切り上げて講義に臨むか、遅刻覚悟でもう少し留まるか。伸るか反るかの瀬戸際で、僕は直観的に判断を下した。後二分でここを出る。ここから教室まで走って三分以内には到達する。この計画が実行可能かどうかを熟考する前に、僕は立ち上がっていた。とりあえず出席さえすれば、後でトイレには行ける。

拭く、流す、履く、洗う。考えうる限り最短のモーションでトイレを飛び出した。そして人気のない廊下を一直線に駆け抜けた。

その姿はまるで、沈みゆく太陽の十倍速い速度で走り行くメロスのようである。友人を人質に取られたメロスと、講義に遅刻したくない己を比較するのも傲岸不遜であるが、我が心境は其れと同等のものであった。

廊下に風が起こり、景色が後ろに流れてゆく。何も考えず、ただ目的地に向かう光となった。

しかし、真白き頭の中で妙な違和感を覚えた。『おかしい、明らかにスムーズすぎる』。スムーズなのはいいことだが、あるべき物がそこになかった。『あるべき物？　いや、者？』

講義室の前にたどり着いたとき、違和感に気が付いた。人の気配がない。教室の中に誰もいない。それどころかトイレから教室に向かうまで、人に全く出会わなかった。そうだ、普通なら遅刻気味の生徒が教室に向かっているはずなのに、まったくその姿が見えなかった。

ふと、嫌な予感が頭をよぎり、僕はリュックサックの中からパソコンを取り出した。近くにあった椅子に腰かけて、メールボックスを開いた。未読の欄に一通の知らせがあった。

『本日の講義は休講になりました』

真っ白な頭の中に辞書を呼び起こし、言葉の意味を考えていくうちに、真っ白な頭が寒色味を帯びていくのを感じた。永遠にも等しい苦悩が無意味であることを告げられ、僕は椅子から流れ落ちるように、その場にへたり込んだ。

バクンバクンと波打つ心臓の音だけが聞こえている。安心と絶望が同時に全身を流れる。血液が凍結するような恐ろしい感覚が体の芯まで広がった。精神と肉体から温もりが失われた。

僕はふらつきながらトイレに向かった。そこで体に残ったすべての感情を吐き出した。それ以降の記憶ははっきりしない。ただ絶望の記憶がそこにあるだけだった。

しかし、僕は前に歩を進めなくてはならない。この絶望を糧にして、人は大人になっていくのだから。

No.16　大人の階段上る

子供のころはクリスマスが楽しみで仕方がなかった。クリスマスイブの夜はサンタさんを一目見ようと、狸寝入りを試みて寝落ちしてしまう。そして気が付くと枕元にサンタさんにお願いしたプレゼントが置いてある。この時の喜びときたら、サンタさんの姿を見られなかった悔しさを消し飛ばすほどである。あの時のワクワクは今でも忘れない。

サンタさんを写真に収めて、未確認人物の第一発見者になろうと夢見ていたころもあった。しかし、年月を経るにつれクリスマスに対する喜びが零に漸近していく。

欲しいものは自分で買えるようになり、爆発するような大きな喜びを経験する頻度も減ってきた。どうして子供のころはあんなにはしゃいでも疲れなかったのだろうか。今ではあの頃のようにはしゃいだら、丸一日は寝込んでしまうだろう。これが若さというのだろうか。

クリスマスにバイトのシフトが入っても、何ら思うことがない自分に気が付いたとき、僕はクリスマスを普段通りの日と同列に認識していること知った。プレゼントや雪に夢を見ることもなく、ただいつもと同じような日々を過ごす。

三六五日の内、意識することがある日など、今では自分の誕生日くらいしかなくなってしまった。しかも、年をとることになんだか切なさを覚えてしまう。「はあ、若さっていいな」と老人ぶってみたりする。まだ二十代になったばかりだというのに。

クリスマスもお正月も節分もハロウィンも、いつもの日と何ら変わることがない。ハレとケの境界があいまいになり、やがて区別がつかなくなる。イベントだから盛り上がるという思考回路も、年を重ねるたびに徐々に薄れていった。

これが大人になるってことなのか。

僕にとってお正月とは、お雑煮を食べる日という認識でしかない。年越しの瞬間ジャンプすることもなく、お年玉に胸を躍らせることもない。

大晦日はバイトのあと、帰宅してシャワーを浴びた。立ち仕事で疲れた脚を何とか動かし、布団にもぐりこんだ。夜中に目覚めてトイレに行こうと思った際に時計を見ると、いつの間にか年を越していた。それでも何ら変わることがない夜だった。隣人も眠り、草木も眠る丑三つ時である。ただ自分の衣擦れの音が聞こえるだけ。壁を伝ってトイレに向かった。そしてトイレに行き再び床に就き眠る。「明けましておめでとう」という言葉も心に浮かばなかった。それより立ち仕事で疲れた足を労わる方を優先すべきだと思った。

年を経るにつれ、日々に大きな感動はないが、小さな幸せを積み重ねるような生活に漸近していくように思う。

大人になるってこういうことなのか。それとも僕だからこうなったのか。ともかく、大きな喜びはないが、小さな幸せをかみしめながら生きていく。それが浦賀カスミの人生である。と今なら少し自信をもって言える。

取り敢えず、京助と夏彦、あいつらに明けましておめでとうくらいはメールで送っておこう。

No.17　届かない恋慕

稲敷小雪と浦賀カスミの関係は、邂逅から数か月を経た今でも何ら変わることはなかった。僕と彼女の関係をどのような言葉を用いて表したらいいのか。どんな言葉を使ってもむず痒く、もはやこの関係に名前を付けたくない。付けたところで得もない。

紳士としての立場を貫きつつ、もう少し接近したいという気持ちを制御しながら、日々を送っている。彼女との思い出を噛み締めていくだけで、何百年も生きていける気がした。包み隠さずに言えば、彼女に惚れていたのだ。彼女に出会う度に、互いを知り、僕は彼女に心を捧げていった。しかし、僕はそれを悟られるわけにはいかなかった。その理由はいまだ不明である。くだらないプライドというやつなのか。何か不利益が生じるのか。バレたところで何も変わりやしないのに。

……いや、思い出した。他人に自分の気持ちがばれるということは、恐れの対象としては十分すぎることを。

他者からの好意というものは大きな幸福、または大きな嫌悪をもたらす。気になっている人から自分が好意を持たれていると知った時、それは何物にも代えがたい幸福であろう。片思いが両思いであることを確信したとき、人は我を忘れて、心が天に達する思いであろう。食事や睡眠も忘れてデートの妄想を繰り広げ、シロップのような甘々な体液が脳を浸すだろう。しかし、好いていない人間から向けられる好意というのは、受け手によっては嫌悪感につながることがある。嫌悪する相手の好意を受け取った者は、自然と苦虫を噛み潰したような表情をする。そういった顔を何度も見てきた。見てきたというこ

とは、僕自身が望まれない好意を振りまき続けてきた存在であるということだ。あの頃の僕は純粋だった。愛を投げかければ、愛で応えてくれるという思い込みがあった。しかし、人間はそんなシンプルな生き物ではない。好意が嫌悪を生み、嫌悪が好意を生むことさえある。愛で地球を満たそうにも、我々は万人に愛を与え、愛で応えられるほどの博愛主義者ばかりではない。席替えで隣になったら泣き出すような子、手を差し伸べたら拒絶する子、そんな人たちと愛を共有するなど、夢物語にも程がある。そして、互いを遠ざけるようになり、自然と縁が切れる。そんな結果になるとしたら、好意が他人に露呈することを避けるのが得策であると僕は考えた。これまでの人間関係の果てに僕は何を見出したのか。裏切りに対する恐怖か、それでも信じ続けるお人好しさか。そうやって人間関係の構築を実践せずに、思考ばかりが加速していく。

いくら幸せでにやけてしまいそうになっても、彼女の前では常にポーカーフェイスで振舞うように心がけた。精神世界と現実世界の境界で鎖国政策を取り、精神世界の感情たちが外部に漏れ出ることを防いだ。しかし、心の中から聞こえるのだ。感情が泣いている。外に出たいという心の叫びが境界の壁を叩く。そして僕は心苦しいと思いながらも見て見ぬふりをした。

他者を好きになることと、信じることは似ているようで大きく異なる。他者を好きになることはそこまで難しいことではない。問題は信じること。それは何よりも困難であり、まだ人類が誰も到達したことがない未知の領域なのだ。

好きは一方的でも、信頼は相互である。僕は僕を信じることができる。だから僕は自分を愛していると胸を張って言える。自分を愛せる。これは何よりも大切なのだ。これは他者を愛するための前提条件である。即ち、僕はその次の一歩、自己の愛から他者への愛の間の大きな段差を乗り越えられずにいた。

相手が自分を愛している保証がない。保証がなければ動けない。僕はそれほど臆病なのだ。保証がないのに進むなんて、僕にはそんな危険な賭けに飛びこむ度胸はない。

世間では信じることを美徳とされがちだが、それは裏切りの恐怖を知らないおめでたい連中の戯言に過ぎない。本当の意味で信じるということは、大いなる覚悟とリスクを伴うことを彼らはまだ知らないのだ。

今の僕は彼女に裏切られてもいいと思っている。しかしながら、自分自身はそう簡単に変えられない。過去の経験から形成された己の習性、人格、価値観は一朝一夕で破壊できるものではない。経験、人間関係など、過去というのは忘れたころに災いとして襲い掛かってくる。人間は過去から逃れることができない。そして、過去と

の因縁に決着をつけられるのは僕自身しかいない。
僕は過去を乗り越えることができるのか。既存の自分を打破し、新たな自分と彼女の心を手に入れることができるのだろうか。

No.18　高嶺の花の蝶

稲敷小雪はいわゆる人気者である。彼女の周りには常に人がいて、誰かとにこやかに談笑している。
彼女の魅力は一目見れば誰にだってわかる。どんなに節穴な眼を持つ者でも、横目に彼女の姿が映るだけで視線を奪われてしまう。話す、歩く、笑う、眠る、励む。その全てが可愛らしくて、それ以外のことがどうでもよくなる。彼女の姿さえ見られれば、生命の危機に瀕しても動じない自信がある。彼女はまさに、生ける芸術なのである。美しき者よ、汝の名は稲敷小雪なり。
最初の内は彼女の周囲にいる彼らを許容することができた。彼女だって友人くらい選ぶだろう。悪い男にとって食われたりしない。彼女が自分自身で選んだことなら、僕がとやかく言う筋合いはない。それくらいの余裕がなくて何が紳士だ。彼女の幸せが僕の幸せなのだ。そう思うことで心の平穏を保とうとした。
しかし、恐れが僕の心を乱す。彼女が誰かと話をしていると心がざわつく。
もし彼女と他の男とねんごろになろうものなら、僕は満腔の怒りを込めて、その男に鉄拳をお見舞いし、不幸のメールを送り付けて、そして校舎裏に呼び出されて返り討ちにされてしまう。
これは嫉妬というのだろうか。前にもこんな思いをしたことがある。中学校の頃、初恋の人がほかの男と親しくしている現場を目撃した時の感情に似ている。現在のかくのごとき状況は、あの時と全く同じである。
僕はあの頃から何か変わっているのだろうか。あの頃からずっと、ただ指をくわえてジェラシーファイアーが燃えているのを眺めるだけである。彼女と仲良くなろうとする努力もせず、みっともなく妬んで、自分の中でそんな醜悪な想いが渦巻いていることに嫌気を指し、自己嫌悪に陥っているだけではないか。
もしかしたら、彼女から見た僕はただのエキストラなのかもしれない。例えるならば、彼女という高嶺の花に向かって飛び立ったものの、花に集まる悪い虫にボコボコにされて、羽根をズタズタにされて墜落する蝶のようである。そう、僕は花を夢見ていた蝶、地べたで力尽きた蝶である。高嶺の花は地べたの蝶など目もくれないだろう。
浦賀カスミという男を客観的に眺めてみても、これと

いった長所が見当たらないことは明らかである。有象無象の男の中で、ひときわ異彩を放つわけでもない。淑女の目を引くような魔性の魅力も話術も見当たらない。むしろ男にもててしまうほどだ。

そもそも、僕と彼女の接点は、ただ同じ時間の同じ電車に乗っているという点だけなのだ。そこから仲は進展したが、彼女の心を理解したわけではない。僕は彼女の人生を知らない。彼女のことを何も分かっていない。

僕はあまりにも未熟である。彼女のことを知ろうともせず、彼女と仲良くなろうとする努力もしていない。

僕は、僕自身をどうしたいのか。彼女とどう接したらいいのか分からなくなってしまった。

No.19　踊る阿保に、食う阿保

冬休みが明ける数日前、再び冬将軍がこの地に来襲してきた。今年は毛布と掛布団を重ね、コート、手袋、温かいインナーと豊富な防具を用意しておいた。

冬将軍の氷結の矛でさえ貫くことのできない厳重な装備の前では、もはや冬将軍の猛攻など蚊ほども効かない。

その日の夜、布団に入ってふと思った。『そういえば、去年も恋人出来なかったな』と。今の僕は、稲敷小雪に対する歪んだ想いが心の底で蠢いて、煮え切らずにただ布団にくるまっているだけの男である。この状況で僕を物理的に冷やすことはできなくても、精神的に冷やそうとするのは容易である。そうか、これが冬将軍の新たな作戦なのか。全国の恋人がいない人間の心を冷却して、その負の感情を糧にしているのだろう。何と卑怯な、許しがたい……そんな妄想を暖かい布団の中でしていると、携帯の着信が鳴った。どうやら高萩夏彦からメールが来ているようだ。要件名は、『鍋パしない？』である。何とも率直な要件である。内容は冬休みが終わる前に高萩夏彦、月居京助、浦賀カスミで夜通し鍋をつつこうという企画を催すというものだった。実のところ、心がちょっぴり冷え気味だったので、人と鍋を囲むという案に賛成である。僕は承諾の返信をして、眠りについた。

鍋パの開催日は、数日後となり各々準備を進めていった。ある者は調理器具や食材をそろえ、ある者は夜な夜な楽しむための大人のビデオを吟味していた。イベント前のワクワク感というのを久しぶりに思い出した。ひと時の思い出をつくるというのは、とても尊くて、愛しくて、かけがえのないものである。根拠はないが、今回のパーティーは絶対楽しくなるという確信があった。

まだかな、まだかなと待ち続け。カレンダーを眺めて、今か今かと待ち続ける。

そしてついに、約束の日が来た。

その日は昼過ぎに夏彦宅に集合することになっていた。家を出ると空は白んでいた。新年が明けて数日しか経過していないため、かなり冷え込んでいる。馬に跨った冬将軍が今にも駆けて来て、ご乱心して暴れ回る様が容易に想像できる。息を急に吸うと、鼻の奥が刺激されてツンッと痛んだ。

「こんにちはー。カスミです」
「おひさー。元気してたか」
夏彦宅に来るのは久しぶりだった。前回来た時より部屋の様相が少し変わっている。本の量が増えていたり、新しいカーペットが敷かれていたりと、初めて訪れた時からずいぶん時が経っていること感じた。
テーブルの上にはカセットコンロと大きめの鍋が設置されていた。そして部屋の奥には月居京助がいた。ベッドの下をガサゴソと漁っている。
「おやおや、カスミ。久しぶりだな」
彼が振り返って手を振りながら微笑んだ。
「お前何やってんだよ！」
ベッドの中に吸い込まれるように漁る京助を夏彦が引っ張り出した。
「いや、小銭やらイケナイモノでも落ちていないかと思って」
「俺の部屋を何だと思ってるんだ」
ああ、こいつらは変わらないな。出会ってから一年が経とうとしているのに、我々は相も変わらず阿保のままだ。無論、僕も含めてだけど。そう思うと、いつまでもこのままでいたいという気持ちが湧いてくる。人生の煩わしさなど忘れて、彼らと阿保のままでいたい。暇だけど退屈しない彼らとの日々と共に生きていたい。

そんじゃあ、作り始めるけど例の物は持ってきたか
「言われた通り野菜持ってきたけど」
事前に夏彦からの連絡で、鍋に使う野菜を一通り持ってきてほしいと連絡が来たので、ビニール袋いっぱいに野菜を持ってきた。
「これ食べきれるかな」
「まあいけるでしょ。ちなみに俺は肉をちゃんと調達してきたぞ」
「私も大人のビデオをきちんと持ってきたぞ」
「お前ふざけんなよ！　ぐふっ！　ゲホッ！」
夏彦が思わず吹き出してむせた。声色からして怒ろうとしているのに、笑いが止まらないようだ。
「じょ……冗談に決まってるじゃないか。ほら、言われたものをちゃんと持ってきているよ」
夏彦の表情から怒りが消えたものの、息切れが止まら

なかった。
「……はあ、まったく。こいつが言うと冗談に聞こえないんだよ」
「ははは、ジョークで場を和ませるのも紳士の務めだよ」

そうして鍋パーティーの準備が始まった。
「といっても、洗って切ってぶち込むだけなんだよな」
「ぶち込むだけではなく、きちんと並べろ。見栄えが悪くなるではないか」
「いいんだよ。結局食うのは俺たちなんだから。見栄えなんて気にしたってしょうがないだろ」
なんやかんやで準備が終わり、蓋を閉じて鍋に火をかけた。
「あとはじっくりと煮込むだけだ」

「夏彦に聞きたいんだけどさ、人と話すときのコツってあるのかな」
火が通るまでの間、雑談しながら過ごすことになった。
僕は夏彦に何気なくそんなことを聞いてみた。
「なんだよ。急にそんなこと」
「いや、ちょっと悩みというか。もっと人と仲良くなりたいなとか思ったりして」
「俺らの前じゃ結構話せるじゃん」
「いや、それだけじゃなくて。他に話したい人がいるんだよね」
夏彦が頭を抱えてウンウンとうなっていた。
「だれだよ。俺たちの知らない奴か？」
僕が彼ら以外に会話したい人物と言えば彼女しかいない。稲敷小雪、彼女ともっと話せれば、どれだけ幸せだろうか。そういうわけで、会話に慣れている高萩夏彦に助言を求めてみたのだが。
「喋るだけがコミュニケーションじゃない。喋らないことも立派なコミュニケーションだ。それに挨拶と感謝と謝罪ができれば大体の人間関係はうまくいくだろ。ってこんな感じでいいよな」
「んー、そんな簡単にうまくいくものかな」
「まあ、なんだかんだやってれば上手くいくって」
「そのなんだかんだを知りたいんだけど」
「そんなの気にすんなよ。雑談ができなくたってさっきの３つができてればオールオーケーだろ。あとは勢いに任せればいいんだよ」
「はぐらかされた気がするのは、気のせいかな」
勢いに任せろと言われても、それができればこんなことは聞いてない。自分から質問して何だが、僕と彼では根本から何かが違う気がする。
「君のような能天気なオシャベリストがそんなこと言っ

ても信憑性がないだろうに」
京助が顔色を変えずに言い放った。
「カスミよ。そもそも夏彦に答えを期待するのが間違っているぞ。彼のおめでたい思考回路は簡単に真似できるものではない」
「おい！　なんか馬鹿にされてる気がするぞ！」
夏彦はしばらく我々に文句を言いながら、じゃれついてきた。京助は宥めたり笑ったり馬鹿にしたりしていた。
「はあー。聞かれたから助言してやったのに、なんなんだよ。俺はどうすりゃいいんだよ」
夏彦は頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。
「ふーんだ！　この夏彦さんをなめちゃいかんよ。舐めたら苦い大人の味がするぞ」
「大人の味……か」
京助が神妙な表情で何かを考えこんでいた。

「「いただきます」」
鍋の蓋を開けるとブワッと湯気が立ち上り、辺りを白の世界に染めた。
「うう……眼鏡が曇る」
月居京助の細縁の眼鏡が瞬く間に曇り、いつもの冷厳で静穏な目つきを白いレンズの奥に隠した。
「あっずっ！」
夏彦がいきなり煮えたジャガイモを口に放り込んで、悲鳴を上げていた。
「いきなり直で食べちゃそうなるよ」
その後は、みんなで鍋をつついて楽しいひと時を過ごした。肉、野菜、練り物などを醤油ベースのスープでじっくりと煮込み、我々に幸福と温もりを与えてくれた。
美味い美味いと皆が言い、山のようにあった具材が胃袋へ消えてゆく。そして我々は、バカみたいな話で盛り上がり、じきに夜が更けていった。

「おれさ、男ばっかの大学生活になっちまうんじゃないかって不安なんだよ」
目についたものを手当たり次第に口に入れて、バクバクと食べていた夏彦が、いきなり箸を止めて真剣な口調で話し始めた。
「麗しの乙女とねんごろになってイチャイチャして、あんなことやこんなことをして」
「下衆め。『あんなことやこんなこと』とはいったい何なのだ」
恍惚とした表情で願望を語る夏彦を、京助の鋭い視線が突き刺した。
「そりゃもちろん男のロマンだよ。同時に乙女のロマンでもある。つまり二人のロマンスなんだよ。美しいロマ

ンスを下衆呼ばわりされたくないね」
　京助の言葉や表情など聞きも見向きもせず、夏彦は乙女とお花畑で追いかけっこしたり、じゃれついたりする幻覚を見ているようだ。
「それって女の子にモテたいってこと？」
　疑問に感じた僕は夏彦に聞いてみた。
「身も蓋もないけど、まあそうだよ」
　夏彦の妄想が加速して、表情が溶けたアイスクリームのように融解していた。
「俺ってさ、自分で言うのもなんだけど、けっこうイケてると思うんだよ。なのにさ、今年も恋人ができなかったし、女の子との関わりもなかったんだぜ」
　高萩夏彦。悪い奴ではないのだが、彼が煩悩丸出しで乙女の尻を追いかける様は目も当てられない。へたなゾンビ映画より恐ろしく、追われる乙女の気持ちを考えるといたたまれない。
「夏彦は論外だとしても、カスミは立派な紳士であるよ。私が保証する。いずれ立派な変態紳士に開花できる。将来が楽しみだ」
　なぜか話の対象が急に僕になって驚いた。しかも変態紳士の素養があると言われたが、そんなものは欲していない。横に視線をずらすと、論外扱いされた夏彦の表情が悪魔のように歪んでいるのが見えた。
「おーまーえーなーあ！」
「しかし君は立派に人間として生きているではないか」
　京助の一言で、夏彦の表情が急に緩んだ。
「紳士である以前に、我々は人間なのだからまず人間として大切な物事に注力すべきなのだ。素晴らしき紳士の精神は、素晴らしき人間性の上に成り立つ」
　夏彦はキョトンとしたまま何も言わなかった。
「人として大切なことを遂行できる時点で十分じゃないか。むしろそれがなかったらどんなことをしても魅力など付随するはずもない」
　京助が一呼吸をして、夏彦を真っすぐに見つめた。
「キミは立派な紳士になれるさ」
「そうか……そうだよなぁ。へへへ……」
　こいつ、ちょろい。京助の言葉に踊らされる様子を見てると、夏彦が恋愛という魔物を飼いならせない理由がわかる気がする。

　あれほど大量だった具材も、腹ペコの男三人でつついてしまえばすぐに完食してしまう。残ったのはつゆと具材の破片だけ。しかし、ここで終わるのが鍋ではない。鍋にはシメという第二形態が残されているのだ。
「シメはどうするのだ」
　京助が口を開いた。鍋のシメというのは、大半は米か麺になる。どちらもフィナーレを飾るには十分な役者で

ある。どちらを選択するか悩ましいものだが、僕が選んだのは。
「「うどんがいいな」」
　奇跡的に僕と夏彦の声が重なった。その瞬間、はるか昔の記憶が呼び起こされた。ハモったときの合言葉。それは反射的に口をついて出てきた。
「「ハッピーアイスクリーム！」」
　その言葉の後、少しの沈黙が生まれた。そして急に夏彦が笑いだした。
「ハッピーアイスクリームとか懐かしっ！　ここで聞かなかったら、これから一生思い出すことなかったわ」
「だよね。ほとんど絶滅危惧種みたいな言葉だし」
　ゲラゲラ笑う僕たちを京助は不思議そうに見つめていた。
「ずいぶんと盛り上がっているようだが、いったい何なのだ。ハッピー何某（なにがし）とは？」
　実のところ、僕も最後に聞いたのが十数年前だから、はっきり覚えていない。でも確か……
「誰かと会話しているときに、二人以上が同じ言葉を言ったらハッピーアイスクリームって言うんだよ。そういう合言葉があるの」
　京助が納得したようにうなずいた。
「そんで、先にハッピーアイスクリームを言った人にはいいことが起こるって」
　夏彦が補足をしてくれたが、どこか違和感がある。ハッピーアイスクリームの効果って……
「あれ？　僕の記憶じゃ先に言った人にアイスをおごるってなってるけど」
「おそらく、地域差のようなものが存在する可能性があるのかもしれない」
　京助が興味深そうに笑っている。
「で、どっちが先だった。京助先生、判定を」
「夏彦の方が、若干だが早かったぞ」
「おっしゃあ！」
　夏彦が両腕を振り上げて「ありがとうございます。ありがとうございます」と叫んでいる。そして意地の悪い薄ら笑いを浮かべてこちらを見た。
「カスミルールだと、カスミが俺にアイスおごってくれるんだよな」
　夏彦の言おうとしていることがすぐに分かった。しかし、それを認めてしまったらどうなるかは、目に見えていた。
「そんな期待するような目で見ないでよ。もう夜だぞ。暗いぞ。寒いんだぞ。しかも冬にアイスって」
「私は風呂上がりに食いたいな」
　京助がボソッと呟いた。
「やっぱ食後にはデザートが欲しいよな」

嫌がる僕を尻目に、そんな勝手なことを言っている。
「うわー、言わなきゃよかったよ」
こうなってしまっては僕がいくら抗議しても話が進まないだろう。
「しょうがないな。三人分買って分けっ子するか」
「帰ってくるまでにシメのうどん作っておく。キミの分は残しておくから安心してくれ。ちなみに私はバニラモナカを食したい」
「分かった。あったら買ってくる」
「オレはハー〇ンダッ〇がいいな……カスミの自腹で」
「そんなこと言うんだったら、パ〇コの先っぽで我慢しなさい」
「先っぽで我慢……。その言葉、なんかいいね」
「もうお前は黙ってろ」
僕は立ち上がってコートを羽織り、玄関に立った。
「じゃあ行ってくるね」
「いってらー」
「気を付けて」
玄関のドアを開けると、冷え切った夜の風が部屋の中に流れ込んできた。素早く外に出てドアを閉めた。賑やかだった室内とは反対に、耳が痛くなるように静けさだった。温かい室内から急に寒空の下へ身を晒すと、思わずブルっと体が震える。見上げると星がきれいだった。昼過ぎに集合したのに、もうこんなに暗くなっていたのか。
夏彦宅から最寄りのコンビニまではそう遠くはないが、暗い夜道を歩いていると、はるか遠くに感じられた。小学生の時、夜中にトイレに行こうとして、恐る恐る足を踏み出したあの頃を思い出した。十メートルもないのに、延々と続く廊下を、永遠に感じられるような時間をかけてたどり着いたのを覚えている。
空の月がやけに眩しい気がする。月が眩しいなんて大げさに思えるかもしれないけど、それほどまでに存在感のある月光であった。夏彦宅の周辺は大学から離れており、夜になれば明かりらしい明りも少なくなる。だから月や星の光がよく見えるのだといつか彼が言った気がする。
曲がり角の向こうに建っているコンビニの煌々とした明かりに目がくらんだ。店内には店員さんの他に、僕しかいなかった。適当に数個のアイスとお菓子をかごに入れ、レジに持って行った。コンビニから出ても夜の景色は変わっていない。

世界から生き物が消えてしまったように、何もなかった。何も見えない、聞こえない、ただ視線を上にあげると星と月が見えるだけだった。無意識のうちに、しばらく立ち止まって、星を眺めていた。多少時間が経っても、

この寒さではアイスはそう簡単に溶けない。星の瞬きに目を奪われ、思わず感嘆のため息が漏れた。月明かりはちょうど雲がかかって朧月となっていた。
耳を澄ませても虫の声や鳥の声もなく、車も通らないので怖いほど静かである。今この瞬間に通りすがりの怪異に襲われてもおかしくない。
僕の足音と衣擦れの音だけが聞こえる。そしてこの音さえも闇に紛れて消えていく。音が闇に消えるかのように、自分の存在が夜の街に溶けだして、二度と誰にも認識されなくなるのではという妄想が膨らんでいる。何とも心地よい恐怖だった。

先ほどまでの暗さが嘘であるかのように、光が漏れている夏彦宅に帰ってきた。扉を開けようとしたとき、中から声が聞こえてきた。あの二人の楽しそうな話し声である。邪魔するのも悪いなと思ってドアに耳を当てた。これは決して盗み聞きなどではない。紳士はそんなハシタナイ真似はしないのだ。これはドアに頬ずりをしたらどうなるのだろうという知的欲求から来るものだ。純粋な好奇心による行為を誰も糾弾することはできないだろう。耳を澄ませて聞こえてきたのは、京助の声だった。
「このレシピに記載されている生姜の量は誤植だな。量を十倍間違えている」
「間違えてねえよ。この生姜ジャンキーが」
「生姜のジャンキー、ジンジャンキー。ふふっ」
「お前は何を言っているんだ」
ほんとに何やってるんだあいつら。
どうやらシメのうどんに生姜を入れるかどうかでもめているらしい。僕がいない時でもあの二人は変わらず阿保の会話をしているのだな。でもやはり、そんな彼らが愛おしくてしょうがない。

「ただいまー」
「おかえりー。あとちょっとでできるから待ってな」
買ってきたアイスを冷凍庫に入れ、シメが出来上がるのを待った。
「暇だなあ……。よし、なぞなぞお兄さんになります！」
シメができるまでの間に、夏彦が急にそんなことを言い出して場が静まり返った。
「何なのだ、なぞなぞお兄さんとは」
「なぞなぞお兄さんとは、道行く人になぞなぞを布教するミステリアスで優しいお兄さんだよ」
「間違いなく変出者だな。通報しなくては」
「なぞなぞお兄さんは善良な一般市民なんだ。変出者じゃない」
僕と京助はけたけたと笑いながら、自称なぞなぞお兄

さんなる怪人をからかっていた。
「指名手配されていれば、報酬がもらえるかもしれないな。カスミよ、金があったら何がしたい」
「勝手に話を進めるな。というか指名手配されてるほど危険人物なのかよ」
「懸賞金で焼き肉でも食べに行こうよ」
「カスミさんよォ。友達を売って食う焼肉はうまいのか？」
いじくりまわされ、からかわれ、なぞなぞお兄さんはふくれっ面になっていた。そして、拗ねたように部屋の隅で縮こまっている。
「はい問題。よんでも返事をしてくれないものはなーんだ」
なぞなぞお兄さんは湿っぽい口調で感情を込めずに問題を読み上げた。
大半のなぞなぞ経験者なら、何度か耳にしたことのある問題だろう。ぼくもその答えはすでに知っていた。
「よいこのみんなは分かるかなー。カスミくんはどうかな」
「これの答え知ってるけど、もう言っていいの？」
「チッ！」
「チッ？」
「答えの分かってるなぞなぞなんて、種の分かってる手品と同じだよ。そんなの意味ないよ。なぞなぞお兄さんは人がなぞなぞで悩んでる姿でご飯三杯食えるほど、他人の困り顔が好きなんだから」
「ずいぶんと悪趣味な怪人だな」
「じゃあ京助くんは分かってるのかよ。悩めよおらァ」
「私はそんなことに脳髄の使うほど暇ではない。今宵に閲覧する大人のビデオを選ぶことに集中しているからな」
京助は自分のカバンから取り出したイケナイモノをまじまじと見つめている。
「反抗的なクソガキだな。エキストラチルドレンの風上にも置けないぜ。
どうやら夏彦は教育番組のようなものを想定していたようだ。大人のビデオを吟味する子供に、それをクソガキ呼ばわりするお兄さんのいる教育番組。何ともひどい有様である。
答えを知っている僕と、答える気のない京助の前では、なぞなぞお兄さんの役目はなかった。「おれ悔しいよ」と言ったきり、背を向けてシクシク泣いている。無論、それはわざとらしいウソ泣きである。
京助のウソ泣きを耳障りに思ったのか、京助は呆れたように口を開いた。
「分かった、食パンだな」
「なんだ！　答える気あるじゃん！　でも残念でした－！　違いまーす！」
「この怪人、やはり懸賞金に換金しておくべきだった。

異様なほどに腹が立つ」
「というか逆じゃない？　食パンってミミがあるから呼んだら返事する側だし」
「確かに、それもそうだな。……では、ミミなし食パンか」
「そういう問題じゃないんだよ」
　夏彦は答えてもらえて相当うれしいようだ。むかつくほど屈託のない笑顔で我々の顔を覗き込んで「わかるかなー」と呟いている。そしてしばらく、京助は目を閉じて深く考え込んでいた。
「そうか、わかったぞ！　オフ〇スキーだ」
「別の意味で逆だよ。彼は呼んでないのに返事をする人だから」
　京助の頓珍漢な回答に、ご機嫌だった夏彦も呆れていた。
「じゃあもう答え言うよ。正解は文章。または本とか手紙とか」
「むむっ、それはなぜだ」
「俺は『よんでも返事をしない』って言ったんだぜ。『呼んでも』じゃなく『読んでも』ってな。文章は読んでも返事をしない。つまりそれが答えだ」
　夏彦は表情を窺うように答えを言ったが、京助は納得しない様子であった。
「何を言っている。文章は、私の心に答えてくれる。私が問いという名の呼びかけをすれば、彼らはどこかで答えてくれる。文章とは単なる記号の羅列ではない。彼らは生きて、私の想いに応えてくれる。故にそんな答えは却下だ」
「もうヤダコイツー。無茶苦茶だ」
　確かにそんな言説は屁理屈や詭弁にしか聞こえないだろう。しかしこんなことを真面目に主張するのが月居京助なのだ。
「誤解しないでくれ。私にだけ適用されない答えだというだけだ。文章の声を聴けるのはこの世で私だけだからな」
　やはり彼はどこかおかしい。

　シメのうどん、入浴、アイス、大人のビデオ閲覧を経て我々は布団の中にいた。
「今日は良き日だったな」
　京助がしみじみとした口調でつぶやいた。
「まだ終わりじゃないぜ」
「これ以上何をするというのだ」
「みんなで布団に入ってすることって言ったらさ。あれしかないじゃん」
「ああ、例のあれか。何と言ったか。枕を凶器にコロシアイをするアレだ」

「枕投げってそんなバイオレンスなゲームだっけ？」
「コイバナに決まってんだろ」
「このメンツでするの？」
「たいして盛り上がらないに五百円」
「賭けるな」
「じゃあ、誰から話始めるの」
「まずはオレから……」
「夏彦は言わずもがな。キミが淑女に近づけば遠のいていく。そして女性から近づいてくることなどなお有り得ない。故にコイバナのネタなどあるはずがないのだ。まるでキミを中心に淑女に対して斥力が働く力場が存在するかのように」
「お前は俺を何だと思ってるんだ。まあコイバナのネタなんてオレにはないけどな」
「私もない」
「僕もない」
　僕もないとは言ったものの、僕には実は気になる淑女がいる。しかし、彼女の存在を彼らの前で明かしたくない。決して彼らのことを信じてないわけではない。ただこの秘密は僕の中にとどめておきたいのだ。
「そういえば、数か月前の事だが。きみが女学生と相合傘をしている姿をちらりと目撃したのだが。彼女は違うのか」
「えっ！」

　京助の言葉で過去の記憶がよみがえる。あの雨の日の情景が鮮明に浮かんだ。あの日、傘を忘れた彼女の頼みで相合傘をすることになったのだ。
　あの姿を見られていたのか。あの時、僕は彼女に「誰かに見られて困ることはないか」と確認したが、見られて困るのは僕の方だったかもしれない。
　さて、あの状況をどう弁明しようか。適当にはぐらかして済む問題ではない。特に高萩夏彦が厄介である。夏彦の性格からして、納得するまで追求してくる。こちらがどんなに曖昧な返答をしても、こいつは徹底的に食い下がるつもりだろう。
　僕の恋の話など、こいつから見れば絶好の玩具である。おそらくこれから数か月はネタにされるだろう。
「なにそれ！　ナニソレ！　超気になる！」
「いや、その……」
「ねえ、教えて教えて！　何て娘なの？　大学の子？　同い年？」
「別に恋仲ってわけじゃないし……」
　僕が困っている様子を見て、夏彦はさらに面白がった。一方、京助は申し訳なさそうな顔をして「言ってはまずかったか」と僕に耳打ちをした。僕は京助を安心させるために笑って答えた。
「大丈夫だよ。悪いのは全部夏彦だし」
「おい！　俺が何したっていうんだ」

夏彦は頬を膨らませて、布団の中に潜ってしまった。
「何か今日の俺の扱いひどくないか？」
「そうか？　いつもの事じゃないか」
「はあ！　許せん。枕でしばきたおしてやる」
文句と笑いと枕が飛び交う談笑で、鍋パーティーの幕が下りた。我々は翌日の昼に目を覚まし、それぞれ帰路についた。冬将軍の猛攻も温かい鍋と友達がいれば、悪くないものである。そう思いながら、僕は白んだ空を仰いで、大きく欠伸をした。